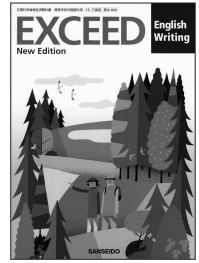


『Exceed English Writing New Edition』

の編集にあたって

—Skill GettingとSkill Usingの両立を目指して



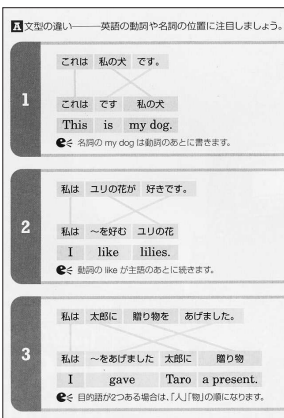
清泉女学院短期大学 飯野 厚

1. ライティング指導の課題

ライティングを指導するに当たり、「さあ、自分の考えを書いてみよう」などと生徒に呼びかける時、それ以前に多くの前提をクリアしていなければならないことがあります。まず文法的、語用論的に適切な文を書くために、モデル文とコントロールされた練習課題をある程度与えているか。また生徒が書くべきメッセージを持てるような題材的なインプットとともに、思考に要する時間や活動などを与えているか。具体的にはブレインストーミングや意見交換などの過程を踏んでいるか等です。このように、高校レベルの学習者にはメッセージの発信という skill usingとしての writingと並行して、skill gettingのための writing活動をバランスよく導入する必要があります。本論では、Exceed Writing New Editionが上記の skill gettingと skill usingの学習過程をどのように保証しているかを解説します。

2. 1文レベルの構文力

Part I 「文のしくみを確かめて書こう」は全24レッスンをほぼ現行通りとしました。あえて大幅に改訂せず、改めて文法と題材重視の視点を踏襲し、1文レベルの構文力を育成することを



最大のねらいとしました。文法の重視はもとより、自己から地域、そして社会や世界へという視点の広がりにもとづいた「書ける題材」の配列もそのままとし、目次を見やすくして一望できるようにしました。

今回更に構文力を強調するために、日本語と英語の語順の対照にもとづいて、書くための初歩的なヒントを示すコーナーを用意しました。具体的には、Lesson1の前とPart Iの8レッスン毎のテーマの切れ目の前にWriting Tipsとして入れました。特に最初のIntroductionでは、「これは、私の犬、です」→「これは、です、私の犬」と日本語を英語の語順に変換してから英訳する、という指導法の一つを具現化しました。この手法は書く力をつけるには英語で考えて英語で書くべし、とする考え方と対峙します。しかしExceedの編集方針はあくまでも日本語での思考を最優先し、生み出されたメッセージを重視します。母語による自らのメッセージを英語に変えて表現することの方が教育的な意義が高いと判断しました。また、この作業は日英間の語順の差に対する意識を高め、1文レベルの正確な英作文力に結びつくと考えています。

同様の視点から、Part Iにおける第2の改訂点は、各レッスンの見開き右側のPractice Itの演習問題②です。和文英訳形式の語順整序または穴埋め問題ですが、もともと4つの設問文をつなげると題材に関連したまとまりのある文章となるようになっていました。今回は4つの文が内容的につながりがあることがはっきりとわかるように、4つの和文をつなげて先に提示しました。このことにより、あとにつづくWrite About Itの自己表現のためのサンプルとなる文章があることを際立たせました。1文の構文力にこだわりつつも、文と文の内容的なつながりを意識させ、まとまった文章を書く skill usingへのつながりを意識しています。

3. 場面や目的に応じた表現力

Part II 「まとまりのある文章を書こう」では、

現行版の場面に加えて「ホームステイのお礼」や「保健委員会より」といった高校生にとって身近な場面を10レッスン設定し、定型の機能表現に習熟する機会を増やしました。また、全レッスンの見開き右ページのWrite About Itの設問①として、モデル文中の目標文を和文英訳で書いてみるという単純な演習を加えました。これは、予定する、賛成する、誘う、謝る、頼む等々の目的に応じた表現の定着を優先させるためです。その後の課題で、手紙、メール、学校新聞等々の場面に応じた表現の活用演習を行うための基礎になります。skill usingとしてのコミュニケーション・ライティングと、その前提となる表現の定着というskill gettingの両面を満たすこととなります。

なお、Part IIの特徴としては、一つの目的を達成するために多様な表現が示されることです。これは場面・機能中心のライティングにより、多少の表現の揺らぎがあっても、目的を達成するために、書き手の判断で間違いを恐れずにさまざまな表現を使ってみる態度の育成を期待しています。このような唯一絶対の正解によらないタスク中心の英作文演習も試みとして提示しています。

4. パラグラフの構合力

この教科書のゴールは、一文レベルの構文力や目的に応じた表現力を統合して100語程度の文章を英語的なパラグラフ構成に従って書けるようになることです。現行版同様に、パラグラフに焦点を当てたレッスンをPart IIIに配してあります。改訂点として、Part III最初のIntroductionで主題文・支持文・まとめ文というパラグラフの作りをまとめて示しました。また題材は現行版から取捨選択し、身近な話題から地球規模的な問題までとりあげられるようにし、例示、比較・対照、原因・結果などのパラグラフ・パターンを具体的に提示しました。各レッスンのWrite About Itには、設問①として文の整序による文章構成の課題を加えました。これにより、基本的なパラグラフの作りを意識させ、後の題材にもとづくパラグラフ・ライティングに活かすことをねらっています。パラグラフ・パター

ンの知識というskill gettingから、パラグラフ・ライティングで自分の考えやまとめた内容を発信するskill usingへとつながることが期待されています。

5. 語彙力

skill gettingの最大の壁は語彙と言えるかもしれませんが、実際、語順の知識はあっても、びたりとあてはまる単語の知識がなくては構文も表現も成り立ちません。Exceedは、人間教育、環境教育、言語教育の3つのコンセプトを柱とした題材中心主義にもとづいて作られています。巻末に付した分野別語彙集には、深みのある多様な題材に対応できる語彙を分野別にまとめて示しました。現行版とほぼ同様ですが、ここでも日本語を先に英語を後に示し、日本人のための語彙にこだわりました。語彙指導において、詰め込みと物量によるリスト学習の効果が反省される昨今、ライティングにおけるコミュニケーションのために使うというskill usingの経験にもとづいた語彙の定着が図られることを願っています。

6. 作文の作心

書くことは4技能の中でももっとも難しいと言われますが、もっとも身につけるべき技能と言えます。最初に触れましたが、生徒が何らかのメッセージや書くための目的を持つことは「作文の作心」ともいわれ、ライティング指導の最大の課題です。生徒が世の中のいろいろなことに興味を持ち、いつも考える癖を身につけることが理想です。自分の意見を抱く習慣形成が必要となります。ただし、これは一朝一夕に成せることではありません。これは英語以前の問題であり、国語や他の教科においても同様の教育的な課題です。しかし、英語においても心と思考という人間の根幹に関わる部分の育成に貢献すべきことは明らかです。生徒に常に考えることや視野を広げることを促すために、教科書と教師が一体となり、メッセージ性の高い情報密度の濃いインプットを与えること、また情報を咀嚼するための相互作用の機会を与えることなどが課題解決の鍵となると思われます。